

研究ノート

「職業（vocation）の神学」に関する近年のアメリカでの研究

才 藤 千津子

同志社女子大学
現代社会学部・社会システム学科
准教授Recent Studies on the “Theology of Vocation”
in the United States

Chizuko Saito

Department of Social System Studies,
Faculty of Contemporary Social Studies, Doshisha Women's College of Liberal Arts,
Associate Professor

はじめに

昨今大学教育においては、キャリア教育プログラムの実施が危急の課題のひとつとされている。国内外では、若者に体系的なキャリア教育を施すことを通して、若者が勤労観・職業観について考察する能力を身につけ、自らの職業選択、ひいては生涯を通しての人生の方向性について考え実現してゆけるような総合力を養うことの重要性が議論されている（たとえば、日本キャリア教育学会、2008、p.16）。しかし一方では、大学でのキャリア教育が「エンプロイアビリティ（雇用されるための能力）」をいかに獲得させるかという教育になり、「フリーター・ニート対策」としてすら機能してしまいがちな現実があることも指摘されている（児美川、2011、pp.55-64）。このような状況のなか、本学のようなキリスト教主義大学においては、「働くこと」が人生においてどのような精神的、宗教的意味を持つのかということを考察するための「ひとつの軸」として、キリスト教精神に基づいた勤労観・職業観を学生に提示することが大切ではないかと考える。

しかしそもそもキリスト教は、仕事や働くことをどのように考えているのだろうか。また、キリスト教で言う「職業・天職（vocation）」や「召命（calling）」とはどのようなものだろうか。英語の「vocation（職業・天職・召命・使命）」という言葉は、もともとラテン語の動詞「vocare」

（呼ぶ）という言葉から来ていると言われる。では、人は誰から「呼ばれる」のだろうか？中世までの西欧世界においては、それは「神」であり、人が宗教的使命に「呼ばれる」ときに「vocation」という言葉が使われた。聖職者に任じられる人々は神から「呼ばれた」人々であり、彼らは「vocation」へと招かれた人々であった。しかし、時代とともに「vocation」の概念は変化を遂げ、特に16世紀ドイツに始まるプロテスタント宗教改革の中心人物ルターによって、職業や天職についての理解が大きく広がった。ルターが「vocatio」の訳語に、意味に幅のあるドイツ語の「Beruf」を採用した結果、天職という言葉は世俗の職業にも当てはまると考えられるようになり、すべての人が神の栄光をあらわすために、仕事を通して神の召命に応えるとされるようになったのである。

キリスト教、特にプロテスタント・キリスト教の職業観や勤労観について、宗教改革者ルターやカルバンをはじめとした伝統的なキリスト教思想や聖書の思想を紹介した書物は、日本語でも何冊か出版されている（たとえば、リチャードソン『仕事と人間』2011年）。しかし、「vocation」というキリスト教神学の考え方について、現代社会に生きる人々、特に若い人々に向けて日本語で書かれた本は、ほとんど見当たらない。では、英語圏とくにアメリカではどのような研究が行われているのだろうか。本稿では、以上のような問題意識のもと、アメリカのリリー財団が

1999年に助成を始めた「職業 (vocation) の神学的研究に関するリリー基金プログラム」というプロジェクトについてのCunninghamの論文を参照しながら、アメリカにおける新しい「vocation」概念形成に向けての神学的模索の成果を概観したい。

1 新しい「職業 (vocation)」概念形成への神学的模索——リリー基金のプログラム

本稿で紹介する研究の多くは、アメリカのリリー財団による「職業 (vocation) の神学的研究に関するリリー基金プログラム (The Lilly Endowment's Programs for the Theological Exploration of Vocation)」から助成を受けて行われた一連の研究の成果である。1999年以降、リリー財団は、アメリカの総合大学やリベラルアーツカレッジで学ぶ学部生を対象にした「現代の若者の職業選択と宗教」についてのさまざまな研究や活動に、多額の助成を行ってきた。その研究成果をまとめたCunningham (2014)によると、ここ数十年の間にいっそう進んだ世俗化の影響もあり、20世紀後半にアメリカで職業や天職について書かれた本の多くは、実践的でセルフ・ヘルプを目的としたものであり、「天職」や「召命」について深い神学的な考察を加えた著作を見いだすことは難しかった。そこで、リリー財団は、「天職」や「召命」についての神学的資源を掘り起こし、今日の状況に合った新しい「職業・天職」理解を進めることを目的として、以上のプログラムを企画したのである。

その際に問題とされたのは、第一に、広く世俗化が進んだ結果、かつて「vocation」という言葉が持っていた神学的、キリスト教的意味がもはや人々の間で共有されていない現状があること、第二に、宗教改革以降「vocation」という言葉が広く解釈されるようになった結果、さまざまな状況に適合する「職業・天職の神学」を提示することが難しくなったこと、第三に、あるライフステージや具体的状況における「天職」の意義については、研究者の間に合意が得られない可能性が高いこと、そして最後に、今日では伝統的な「天職」に関する神学では取り扱われてこなかった新しい問題が出てきたことであった (Cunningham, p.4)。

2 「職業 (vocation) の神学」の形成に向けて——リリー基金プログラムの成果

Cunninghamによると、近年の「vocation」の神学的研

究の特徴は、第一に、聖書や伝統的神学以外の多様な資料を用いて研究が進められていること、第二に、主な読者は職業選択を目前に迫られている大学生を中心とした若者だということが自覚されていること、第三に、伝統的なキリスト教用語をより一般の読者にとってわかりやすい言葉に置き換えようとする努力がみられること、そして最後に、時代とともに変容しつつある「職業の神学」への問いを提示していることである (Cunningham, p.8)。また彼によれば、20世紀末以降の米国での「vocation」研究は、(1) キリスト教神学の豊かな資源であるキリスト教の古典、さまざまなキリスト教思想を紹介したもの、(2) 10代後半から20代前半にかけての若者向けのテキストとして書かれたもの、(3) gift (賜物) や calling (召命) などの伝統的神学用語を現代人にわかりやすいように説明したもの、(4) 伝統的な「職業・天職の神学」を今日の社会状況の中で再解釈しようとしたものという4つの種類に分けられるという。

次に、それら4つを順に説明したい。

(1) キリスト教の古典やキリスト教思想を紹介したもの

このなかの代表的著作としては、聖書から初代教会の思想家、ルターやカルバンなど宗教改革のリーダーたちから現代に至るまで、20世紀間にわたるキリスト教思想の原典を紹介したWilliam C. Placher, *Callings: Twenty Centuries of Christian Wisdom on Vocation* (召命: vocationについての20世紀にわたるキリスト教の知恵) がある。また、聖書学的・歴史的研究の立場から著された著作としては、Douglas Schuuman, *Vocation: Discerning Our Callings in Life* (vocation: 私たちの人生における召命を識別する) がある (Cunningham, p.9)。

(2) 若者向けのテキストとして書かれたもの

これらは、イエスに従う者として神からの召命にどのように応えてゆくべきかという視点から、主にキリスト教主義大学の教員によって書かれたものである。

青年期の若者は、将来の職業選択や生き方についての選択を迫られる。近年、アメリカの多くのキリスト教主義の大学では、宗教的観点から「vocation」やキャリアの問題を考える機会を学生に提供してきた (Cunningham, p.13) が、リリー財団の助成プログラムの中でも、さまざまな研究者によって、青年期の若者、特に大学生向けのテキストが書かれている。それらに共通する傾向は、「voca-

tion」についてのキリスト教の伝統的な考え方から脱して、現代社会に生きる若者に訴えかける職業や労働の精神的、宗教的な意義を新しく探ろうとしていることである。たとえば、John Neafsey の *A Sacred Voice is Calling: Personal Vocation and Social Conscience* (聖なる声が呼んでいる：個人の天職と社会的良心) では、人が「天職・召命・使命」に従って生きるというのはどういうことかを、良心に基づいて社会正義を実現することの重要性を強調しつつ論じている (Cunningham, p. 11)。

(3) 伝統的の神学用語を現代人にわかりやすいように説明したもの

キリスト教の神学用語を現代に生きる一般の読者に向けて説明した著作が、このジャンルに分類されるものである。たとえば、Mark Schwehn and Dorothy Bass (eds.), *Leading Lives that Matter: What We Should Do and Who We Should Be* (意義ある人生への導き：私たちは何をすべきか、どのような人になるべきか) は、「天職」や「ギフト(賜物)」、「徳」などのキリスト教用語を、その神学的意味合いを保持したまま、一般の読者にも理解できるように説明し直したものである。また、「召命 (calling)」について考察したものとしては、John Schuster, *Answering Your Call: A Guide for Living Your Deepest Purpose* (召命に応える：あなたの最も深い人生の目的を生きるためのガイド) があるが、このテキストにおいて著者は、天職を発見する際に自分たちの「主体性」や「選択」を強調する今日の一般的な傾向に対して、あらためて、天職は人間の意志を超越したところからくるという伝統的な神学的解釈を紹介している。以上の他にも、若者が天職の問題を探求するにあたって人生の先輩である「モデル」や「メンター」が果たす役割の重要性を論じたものや、天職に人生を捧げた歴史上の人物たちの生き方を紹介したものもある (Cunningham, p. 15)。

(4) 伝統的な「職業の神学」を今日の社会状況のもとで再解釈したもの

「天職」を探求する心の旅は、どこかの時点で「終結する」ものだと考えられがちである。しかし、天職を求める旅は、本当に、適切な仕事を見つけられた時点で終わるようなものなのだろうか。それとも、何かそれ以上のものなのだろうか。キリスト教的観点から見て「よい仕事」というのは、いったいどんなものなのだろうか。そもそも、働くことの目的についてキリスト教はどう教えているのだろうか。

か。

召命や天職の問題を考えるということは、単に仕事を得ることについて考えるということではなく、信仰の問題や他者への奉仕や人生の意味や目的、ひいては人生の方向性について考えることなのだと言主張する人々がいる。彼らの主張の背景にあるのは、昨今のアメリカにおける雇用状況の変化である。今日の社会に生きる若者の多くは——アメリカのみならず日本においても——、一生のうちにいくつもの職や職種を渡り歩くことを余儀なくされる。そのようななか、若者が「自分にぴったりのたったひとつの職業」をみつけれられるという可能性に懐疑的になるのは当然であろう。そのような形で「仕事をみつける」ことによっては、短期間の解決しか得られないのである。わたしたちの生涯にわたる職業探索を支えてゆくには、単に「仕事をみつける方法を学ぶ」ということ以上のこと、すなわち「自分は誰なのか」、「私の希望や夢は何か」、「どんなものになりたいのか」、ということについて考える必要があるといえるだろう。しかし、そのために自らの「内なる声」に耳を傾けるのは、決して楽な作業ではない。わたしたちの「内なる声」はしばしば、常識的な生き方からはずれて自分本来の声に従うようにわたしたちに呼びかける。そして、その呼び声に答えて未知の世界に足を踏み入れることを恐れ、リスクを冒したくないと不安になるあまり、ほとんどの人が最初の一步を踏み出せずにいるのである。

召命や天職についてのこのような神学的な問いに対して、たとえば Gregg Levoy, *Callings: Finding and Following an Authentic Life* (召命：真の人生を発見しそれに従う) は、天職を発見する旅路を、単なる職業選択のプロセスを越えた霊的・精神的な旅路ととらえている。また、Parkes Palmer, *Let Your Life Speak: Listening for the Voice of Vocation* (人生に語らせなさい：天職についての内なる声に耳を傾ける) は、私たちが人生に向かって何をしたいかや何になりたいかと語りかけるのではなく、逆に人生から語りかけられること、そしてその語りかけの声に耳を傾けることの重要性を説いている (Cunningham, p. 20)。

おわりに

以上、大学生を対象にした「職業 (vocation) の神学的研究に関するリリー基金プログラム」の研究成果について書かれた Cunningham の論文を参照しながら、アメリカにおける「vocation」についての近年のさまざまな神学研究を概観した。以上からわかるように、近年の「天職」

「召命」あるいは「職業」についての神学研究が取り扱うテーマは多岐にわたり、その中で、キリスト教の伝統的な考え方を新しく解釈し直して、現代社会を生きる若者にアピールする職業や労働についての神学を探る努力が続けられ、多くの成果が挙げられている。日本の大学でキャリア教育に携わっている私たちにとっての今後の課題は、このような英語圏の広範な神学研究成果の中から、日本の大学生に向けた代表的なテーマとそれを取り扱ったテキストを日本語で紹介すること、次に、現代日本のコンテクストにおける「天職（職業）の神学」を模索することだと考える。その際、キリスト教文化とは異なる日本人の伝統的職業観や「天職」についての考え方にも触れる必要があるだろう。

mans Publishing Company, 2004.

Schwehn, Mark R. and Bass, Dorothy C. (eds.), *Leading Lives that Matter: What We Should Do and Who We Should Be*, Grand Rapids, Michigan: William B. Eerdmans Publishing Company, 2006.

引用文献

David S. Cunningham, "A Plentiful Harvest: The Fruits of Lilly-Sponsored Programs on Vocations", *the Website Resources for American Christianity*, 2009, pp. 1-30. Retrieved on Oct. 1, 2014 from <http://www.resourcingchristianity.org>

児美川孝一郎『若者はなぜ「就職」できなくなったのか？——生き抜くために知っておくべきこと』日本図書センター、2011年

Levoy, Gregg, *Callings: Finding and Following an Authentic Life*, New York: Three Rivers Press, 1997.

Neafsey, John, *A Sacred Voice is Calling: Personal Vocation and Social Conscience*, Maryknoll: New York, 2013.

日本キャリア教育学会編『キャリア教育概説』東洋館出版社、2008年

Palmer, Parker J., *Let Your Life Speak: Listening for the Voice of Vocation*, San Francisco: John Wiley & Sons, Inc., 2000.

Placher, William C. (ed.), *Callings: Twenty Centuries of Christian Wisdom on Vocation*, Grand Rapids, Michigan: William B. Erdman Publishing Company, 2005.

リチャードソン、アラン（西谷幸介訳）『仕事と人間——聖書神学的考察』新教出版社、2012年

Schuster, John, *Answering Your Call: A Guide for Living Your Deepest Purpose*, San Francisco: Berrett-Koehler Publisher, 2003.

Schuuman, Douglas J., *Vocation: Discerning Our Callings in Life*, Grand Rapids, Michigan: William B. Eerd-